2026 年 10 月 25 日　日本基督教団鳴子教会礼拝説教

善をもって悪に

日本基督教団石巻栄光教会　川上直哉

聖書　　悪に負けてはいけない。
　　かえって、善をもって悪に勝なさい。
　　――ローマ人への手紙 12 章 21 節

１．

本日は、「地区講壇交換」の礼拝となっています。

皆さんは、日本基督教団が「カトリック教会」であると、ご存じでしょうか。――このことは、とても大切なことなのですが、忘れられてしまいがちです。

日本基督教団には「教団信仰告白」があります。教団として信仰するところを箇条書きにしたものです。それを「信じる」としなければ、日本基督教団の教会のメンバーになれない、という建前になっています。その「教団信仰告白」は、前文と本文に分かれています。この本文は、「使徒信条」として知られたものです。それは「ラテン信条」とも呼ばれ、「教会の歴史上 最も古い信仰の箇条書き」と呼ばれているものです。あまり古いので、最大公約数的なもので、あまり異論をはさむ人はいないのですが、ただ、「ちょっと足りない」ということで、同時代の他の信仰箇条も突合せ、足りないところを補うようにして、「ニケア・カルケドン信条」というものが作られることになった。今から 1600 年ほど前のことです。この「ニケア・カルケドン信条」から逸脱するものは「キリスト教ではない、別の宗教」ということになって、今まで、キリスト教は展開しています。このことは、ハリストス正教でも、ローマ・カトリック教会でも、日本基督教団でも、みんな、同じです。

そういう「使徒信条」を、日本基督教団は、採用しています。では、その中身は何か。それはつまり「三位一体の神を信じる」ということを語っています。そして、

我は聖霊を信ず。
　　聖なる公同の教会・・・を信ず。

と、なっています。この「公同」と訳された言葉は、英語では「カトリック」となります。

つまり、私たちに日本基督教団は「自分たちは聖霊を信じており、それはつまり、教会はカトリック教会だと信じている」ということを建前としているのです。

ですから、日本基督教団は、建前の上では、カトリック教会（のひとつ）です。

私は立教大学で神学を学びました。立教大学は聖公会の学校です。そこで、聖公会の神学を教えていただきました。その中で、繰り返し聞いたことがあります。「皆さん、バチカ

ンを中心に展開しているのは、“**ローマ**・カトリック教会” ですよ。たくさんあるカトリック教会の一つにすぎません。」ということです。

そうです。世界には、グレコ・カトリック教会があり（ウクライナなどの東欧にたくさんあります)、ホーリー・カトリック教会があり（これがつまり、聖公会です)、そして、「合同してカトリック教会を形成しようと努める教会」もある。この最後のもののひとつが、つまり、日本基督教団です。その英語名称はUnited Church of Christ in Japanといいまして､｢日本で合同したキリストの教会｣です｡それはカトリック教会の一つなのです。

さて、では、カトリック教会とは何でしょうか。「カトリック」というのは英語ですが、もともとはラテン語で、さらにさかのぼるとギリシア語になり、その意味は「いつでも・どこでも」ということになります。

コンビニエンスストア、という言葉があります。この「コンビニ」という言葉は、ほぼ、「カトリック」という言葉と同じになります。「いつでも・どこでも」です。ここ鳴子の道をずっと行きますと、日本海側に出ます。また、そこから反対方向に戻りますと、最後は石巻に出ます。日本海側でも、太平洋側でも、「いつでも・どこでも」同じ、ということが「コンビニ」です。先日私はマレーシアに行きましたが、そこにもセブン・イレブンがありました。品ぞろえは、違う。でも、確かに同じセブン・イレブンでした。

それと全く同じように、日本基督教団の教会は、どこに行っても、それぞれ「品ぞろえ」に個性がある、けれども「同じ日本基督教団の教会」である。その安心を保持するのは、とりあえず、私たち牧師の仕事です。今日は、講壇交換の日。それはたぶん、「いつでも・どこでも」どうぞ、どの教会に来ていただいても大丈夫ですよ、と、皆さんに知っていただくための機会なのだと思います。

２.

今日、私は初めて陸羽東線に乗りました。8 時 15 分頃に陸前山下駅を出まして、石巻駅で乗り換え、小牛田で乗り換えました。このまっすぐ進む一本の線路は、道路と、おおむね並行して走っています。そして、この沿線上に、石巻の二つの教会と、涌谷・田尻・古川そして鳴子の教会がある。これらは「一つの教会」である。この建前が守られればと願います。そうしたら、教会がうまくいくときにも増長せず、うまくいかないときにも絶望しないで済む、その助けになるでしょう。

石巻から続く一本の線路は、小牛田で東北本線と交差します。今回、途中の涌谷あたりで、接続の電車が遅くなり、それを待ったために、10 分ほど、小牛田駅到着が遅れました。気を揉みました。乗り換え時間は 10 分程度しかなかったのです。しかし、小牛田では「乗り換えを待って」鳴子温泉行きの電車が出発しました。そうして、最後に南部さんの自動車のお迎えをいただき、本当にぎりぎり・ぴったり、私はこの礼拝に間に合いました。

その時、思い出しましたのは、小説『８０日間世界一周』です。ジュール・ベルヌという英国の作家が残した物語で、200 ほど前のものです。そのころ、世界の工業製品の８割方は、英国で製作されていた、という、大英帝国最盛期の物語です。主人公は謎めいた「フォッグ」さんです。英語では“霧”をイメージする名前で、実に謎めいた紳士です。そして、このフォッグさんは「大金持ち」で、社交クラブの変わり者、という設定です。ちょうど時代は大英帝国がインド横断の鉄道を完成させた、という頃でした。フォッグさんは、クラブの仲間と賭けをすることになります。「８０日間で、ロンドンを出て、アジア・米国を通って、帰ってくる」と、できるかどうか。掛け金は、フォッグさんの全財産の半分。数人のクラブの仲間が「不可能」に賭け、フォッグさんだけが「可能」に賭けて、フォッグさん自身が旅に出ます。船と鉄道と象と橇（そり）を乗り継いで、見事、フォッグさんはこの賭けに勝つ。約束の時間の終わる直前に、ロンドンのクラブにフォッグさんは帰ってくる。そんな大冒険物語です。

この物語は、「大英帝国の紳士たるものは、どんな人物であるか」を語ろうとしています。旅を成功させるには、一つの方法がある。それは「数学的な正確さ」を維持すること。冷静であること。そのことを、この物語はフォッグさんに体現させ、伝えようとしています。

何かを成し遂げるためには、それを「正しい方法」で成し遂げなければならない。この 200 年ほど、その「正しい方法」とは、「数学的な正確さを保つこと・冷静であること」であった。そういうことだと思います。そして昨年あたりから、それは急速に崩れ始めました。AI（人工知能）とか SI（超知能）と呼ばれるものが、人間以上に「数学的な正確さ」を担保してくれるようになりました。人間が「数学的な正確さ」を維持する努力は、要らなくなりつつある。それは、私たちの常識が崩れ始めている、ということを意味しています。

ちょうど『８０日間世界一周』が発表された頃、アメリカに一つの伝説が生まれました。「ジョン・ヘンリー」という屈強な黒人の物語です。蒸気機関が、人間の筋肉をはるかに凌駕するようになった中で、ジョン・ヘンリーは立ち上がります。「機械と勝負する」と言って、岩に杭を打つ勝負を、蒸気ドリルと、するのです。そして、ジョン・ヘンリーはそのすさまじい筋力を用いて、見事、機械に勝利する。しかし、その勝利が確定した後、無理をしすぎたジョン・ヘンリーは息絶えてしまう。――これは、スーパーマンやバットマンなどのアメリカン・ヒーローの原型となる伝説となり、今も「アベンジャーズ」などの映画に活きている物語です。

「AI」をめぐって、深刻な心配が広がり、不安を広めています。でも、多分、大丈夫だと思います。同じことは、「筋肉」の価値をめぐって、200 年前にありました。筋肉に変わって、「数学的な正確さ」が目指されるものとなった。そして、それもまた、切り替わろうとしている。常識が変わることは、不安を呼びますが、まあ、大丈夫だと思います。200 年前

に人々を不安にした蒸気機関の改良版であるディーゼルエンジンに運ばれて、今日、私は快適にここ・鳴子教会に到着したのですから。

そうだとしても、教訓は引き出せます。つまり「何かを成し遂げようと思ったら、正しい方法を用いなければならない」ということです。これまで、その「正しい方法」は「数学的な正しさ」であり、それを目指して切磋琢磨することが求められた。そして、それは曲がり角を迎えた。それでも、やっぱり、「正しい方法」は、今も求められます。

今度の火曜日、私は日本基督教団東北教区宮城北地区婦人会研修会で講師を務めます。「米国の福音派教会」について、話をするのが、お預かりした私のお役目です。その準備をしている中で、あ、と思うことがありました。「LGBTQ＋」のことです。

みなさんは、「LGBTQ+」ということを、どのように思いますでしょうか。普通の日本語で言えば、「レズ」「ホモ」ということになりましょうか。そこに差別的な気配がまとわりつきましたので、そうした言葉遣いを避けるようになりました。それは、良いことです。私は、友人に、幾人か、いわゆる「LGBTQ+」の方々がいます。それぞれ、当たり前の人間です。良いところも悪いところもある。それなのに、そうした人々をいじめる言葉が聞こえます。それも、聖書を用いて・クリスチャンとして、いじめる声が聞こえる。嘆かわしいことです。腹立たしいことです。神様が、どんなに悲しみ・嘆き・怒っておられるか。

さて、そうしたことを前提に、米国で起こったことをひとつ、ご紹介します。ある州の学校のことです。子どもが家に帰ってきた。親との会話があった。そこで「もっと男らしく・・・」と、母親が言った。すると、子どもが口を尖らせて、「なんてひどいことを言うんだ。僕は男でない、かもしれない。お母さんは差別主義者だ。僕はお母さんを軽蔑する」と言った。お母さんは、本当に、ショックを受けた。そのことをお友達に相談すると、自分のような傷ついた経験は、同じ学校の「ママ友」にたくさんいると分かった。学校で、そのように教えていると、分かった。

似たような事例は、私たちの周りにたくさんあります。「韓国人奥さん」「フィリピン人奥さん」と呼ばれる方々が、私たちの住む田舎の地域には、たくさんおられます。日本語学校の整備も足りないので、とても、日本語に不自由されます。それでも頑張って、子どもを小学校に通わせる。しばらくすると、子どもが母親を軽蔑するようになる。「お母さんは変だ。日本語もちゃんと話せない」と。一所懸命育てた子どもに、一所懸命やった成果として、軽蔑されることになる。そのつらさ。

米国のお母さんたちは、黙っていませんでした。日本とは違って、PTA は、米国で実質的な権力を持っています。学校と掛け合い、苦情を言って、議論する。学校側の先生は、そんなお母さんを軽蔑するような態度をとる。「この差別主義者が」という感じ。それで、感情的な対立になる。すると、当時のバイデン政権は、なんと、連邦の警察である FBI を送ってきて、このお母さんたちを「テロ予備軍」として捜査し始める。

これは、実際にあったことで、そうしたことを経て、「そんなバイデン政権よりは・・・」と、常識的なお母さんたちが、トランプ派の議員や知事を選ぶようになった。たとえば、そうしたことが重なって、今の世界がある、ということです。

正しいことも、「正しいやり方」で進めなければ、うまくいかない。かえって悪くなる。「上から目線」で「高慢」で「軽蔑する」ようなやり方では、差別主義は消えない。むしろ、助長される。今日の聖書の個所は、そうしたことを思い起こさせるものです。

３.

今日の礼拝の「招詞」は、小林先生のご配慮でしょう。今日の聖書個所の最初のところが選ばれていました。この言葉、つまり、「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。」から、今日の聖書の個所「悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝なさい。」の間に、「善＝正しいやり方」が、書いてあります。それは結局、つまるところ、「互いに相手を自分より優れたものと思え」ということだと思います。この言葉はフィリピの信徒への手紙にも見られる。つまり、これは「パウロが口を酸っぱくして言っていること」ということになります。フィリピの信徒への手紙のほうでは、「それはキリストにみられることだ」となり、ローマの信徒への手紙のほうでは「そうすれば、私たちはキリストの体の肢（えだ）となれる」という具合に語られています。

自分にとっては「どうにもおかしい」誰かを、どうぞ、今、みなさん、想像してみてください。その人を、「自分よりも優れた者」と思うこと。それが「正しいやり方」であり、あるいはそれが「自分自身を神様に生贄としてささげること」であり、それがつまり「本物の礼拝だ」ということにあります。

ここには、知恵があります。「やせ我慢」をしてでも、聖書の言うとおりする。そうしたら、教会は本物の礼拝ができるようになり、私たちはそれぞれキリストの肢として機能し始める。このことを、聖書から聞きたいと思います。そうできるように、忍耐力を・信仰を・何とかなるはずという希望を、神様からいただきたいと思います。そのために、祈りを合わせましょう。きっと、神様は、そのような私たちに、私たちをひとりずつ、変えてくださると思うのです。